

# シリアでの文化財破壊と地域社会 ——北西シリアの事例から

元アレppo博物館客員研究員／元アレppo大学考古学科講師

シリア女性自活支援グループ「イブラ・ワ・ハイト」発起人 山崎 やよい

## 1. 紛争勃発後のシリアでの文化遺産の侵害

2015年夏、ベール神殿を始めとするパルミラ遺跡の象徴的な遺構がISにより次々と破壊された。シリア砂漠の中央部に位置するパルミラ遺跡はかつて「シルクロード」の要衝として栄え、その優美さは世界中の観光客を惹きつけて来た。世界のメディアはその破壊の状況を、ISの投稿するショッキングな写真やビデオを添えて大々的に取り上げた。それは皮肉にもISのプロパガンダの片棒を担ぎ、当時甚だしく進行していたシリア政権による市民への殺戮行為の格好の目くらましとなった。しかしISがシリアでの抗争の本質ではないのと同様、このような「派手」な破壊行為はシリアでの文化財侵害の本質ではない。

遺跡の破壊に関して言えば、ISのプロパガンダ的破壊以外にも、遺跡や周辺地区が軍事拠点に設定されたことで攻撃目標となったり、軍事訓練用キャンプとして使用されることで損壊を受けるなどの事例は多く、それに加えて抗争がもたらす無秩序の中で、遺跡の盗掘や盗掘品の密輸が一層促されているのも事実である。

シリアにおいて「形ある文化財」は、かくして、極めて大きな損失を被りつつあるが、より深刻なのは、このような侵害が常態化する中で起こる、地域社会の人々の「文化財を文化財として考える機会」の喪失である。もちろん、これほどまでに人間の尊厳が脅かされ蹂躪される中、文化財以前にまずは「人間」の保護が必要とされることは言うまでもなく、基本的な生活要件の確保を訴える現地の声に世界はより積極的に対応せねばならない。しかし、この厳しい状況の中でも、文化財の究極の意義を受け止め、真摯に活動する現地グループや個人も存在する。シリアの考古学に長年関わって来たものとして、彼らに共鳴しつつ北西シリアを中心として本稿を進めたい。

## 2. 遺跡の盗掘とその背景

シリアにおける文化財の侵害、特に遺跡の盗掘は、現行の紛争以前から行われていた。例えば、ハマ県北西部の古代都市遺跡アパメアでは、以前から売人が遺跡見学者に公然と盗掘品を売りつけに来たし、筆者が調査に関わったユーフラテス川流域の遺跡の周辺住民は、「発掘団」と名乗る盗掘団の作業員として働いたと証言している。そして当時から盗掘

された遺物の国外への密輸ネットワークも存在していたようだ。

しかし紛争勃発後は、市民の盗掘への「参加」は大きく増えた。その背景には紛争によってもたらされた極度の貧困がある。あるメディアによると<sup>1</sup>、盗掘で生計を立てているイドリブ近郊地区在住のある男性は、5-6人で構成される複数のグループを作り、金属探知機などを使用して、毎日遺跡に向かっているという。この男性は「生計を立てる道がほとんどない中で、この『仕事』は私達の権利であり、子供達の権利でもある」と言い切る。

地域の治安状況の劣化を逆手に盗掘を取り仕切る軍関係者や武装集団も多い。イドリブ南部のある村の住民は、武装集団の戦闘員たちが村の古代教会跡にブルドーザーを持ち込み、「発掘許可」のもと遺物を保護するとして白昼堂々と盗掘を行ったと証言する。ちなみイドリブ県を中心とする北西シリアー帯には、「Dead Cities (死せる町)」と呼ばれるローマ～ビザンチン時代の廃墟が広がり、2011年にユネスコの世界遺産に登録されたが、その



イドリブ、カファル・ルシーンの古代教会跡と避難民のテント  
(2020年3月ムハンマド・サラージュ氏撮影)

1 <https://aawsat.com/home/article/2473716/%D8%A7%D9%84%D8%AA%D9%86%D9%82%D9%8A%D8%A8-%D8%B9%D9%86-%D8%A7%D9%84%D8%A2%D8%AB%D8%A7%D8%B1-%D8%B4%D9%85%D8%A7%D9%84-%D8%B3%D9%88%D8%B1%D9%8A%D8%A7-%D9%85%D8%B5%D8%AF%D8%B1-%D8%AF%D8%AE%D9%84-%D9%84%D9%84%D8%B4%D8%A8%D8%A7%D8%A8>

後2013年には危機遺産に指定されている。

これらの記事や、現地の知人から伝え聞く出来事からは、各勢力、個人が入り交じった文化遺産侵害の混沌が見て取れる。しかし同時に現地の声は、これが文化財の損壊の問題にとどまらないことを、当初より指摘している。シリア紛争において不条理な論理がまかり通り、人道的環境の劣化が進む中、一般市民の生活は物心双方で疲弊し、これに伴う様々な弊害が市民社会を圧迫し続けているのだ。

### 3. 北西シリア：地域社会への働きかけ

#### 3-1. アフリン地区

10年を超える紛争による人道的環境の劣化の中、様々な理由で教育機会を失い、特定の技能も習得せぬまま一定年齢に達した青少年たちが今、容易に武装集団に加わったり、盗掘など安易な金儲けに駆り立てられている。これは非常に深刻な問題で、アレッポ西部アフリン地区で青少年問題に取り組む友人は、この境遇の中で育つ青少年の精神的荒廃が進行していることへの大きな懸念を表明する。

友人は、有形無形の「文化財」の活用がこれら青少年の保護や意識向上に有効であると認識し、遺跡見学などの試みを行っているが、実際、文化に対する普遍的価値を教えることは極めて困難であると洩らす。また、困窮した家庭からはその意義への十分な理解が得られず、成果を出すためには継続的な活動が必要であるにもかかわらず、わずかな活動費すら確保できない現状を訴えている。

#### 3-2. イドリブ文化財センター

一方、北西シリアの中でも、イドリブ地区には紛争勃発直後から一貫して文化財の実質的な保護活動を行ってきた団体が存在する。ヨーロッパ在住のシリア人研究者との共同で、地元の考古学研究者、法律専門家グループにより2012年に設立された「イドリブ文化財センター」がそれである<sup>2</sup>。同センターは、「国際法と1954年のハーグの『武力紛争の際の文化財保護条約』に従って、文化財、人権、人権の保護に取り組む」との理念のもと、紛争下にあっても文化遺産の重要性に対する社会意識の深化・拡大に努めている。

メンバーはトルコにて、スミソニアン研究所の「紛争時における文化財保護と遺産管理」に関する研修を受ける機会を得、実際的な保護・保存活動や記録作成、具体的にはイドリブ地方の文化財侵害状況のドキュメンテーション<sup>3</sup>や、地域の学校や大学などでの文化財に関する意識向上運動、児童・生徒等の博物館見学支援、その他のコミュニティー・アウエ

---

2 <https://www.facebook.com/Idleb-Antiquities-Center-1070868956264699>

3 日本の筑波大学とも共同して、カルブローゼ遺跡の3D計測などを行った実績もある。

アネス活動を行う。

また、海外拠点のシリア人NPO<sup>4</sup>などとの連携で、空爆によって大きな被害を受けたイドリブ博物館やイドリブ地方の一部の遺跡整備も行ってきている。

このような実績を持つものの、運営資金は常に不足している。センター責任者のアイマン・ナボ氏は、現地メディアの取材に応え<sup>5</sup>、国際機関の支援優先事項の中で、文化財問題は二の次と捉えられていること、またユネスコがダマスカスの古物博物館総局のみを対象に支援を提供していることを指摘するとともに、ユネスコが反体制派地域において文化財関係活動を行っている組織を認定しないことが問題を生んでいると強調している。

しかしながら、同センターはユネスコやヨーロッパの共同機関と継続的なコミュニケーションを図っており、活動に対して国際的な便宜が促進され、文化財に関する問題が幾ばくでも進展することを希望している。



児童生徒によるイドリブ博物館見学 2021年3月7日

出所：イドリブ文化財センターFacebook

- 
- 4 SIMAT (SYRIAN FOR HERITAGE )  
[https://syriansforheritage.org/?fbclid=IwAR0Au6hoTIJ7IEBSxu3xnoiYgpfmDaL\\_rHM\\_Y2AdtV1Six\\_WPK6\\_37KjKA](https://syriansforheritage.org/?fbclid=IwAR0Au6hoTIJ7IEBSxu3xnoiYgpfmDaL_rHM_Y2AdtV1Six_WPK6_37KjKA)
- 5 [https://english.enabbaladi.net/archives/2021/03/idlibs-antiquities-tragic-and-forgotten/?fbclid=IwAR32dGGBkK-etOm6h-EJxjo-\\_gnMtAasM5URXOtWm5p135aKzUak8DGIY18](https://english.enabbaladi.net/archives/2021/03/idlibs-antiquities-tragic-and-forgotten/?fbclid=IwAR32dGGBkK-etOm6h-EJxjo-_gnMtAasM5URXOtWm5p135aKzUak8DGIY18)



遺跡の現状のドキュメンテーション作業 2018年12月22日  
出所：イドリブ文化財センターFacebook

#### 4. 結び

将来を見通せない現状の中、シリアの文化財に関する問題には、それのみでは解決できない課題が山積している。しかし、上述のように次の世代に文化財を引き継ごうと動いているシリアの人々が現に存在する今、彼らの努力にさらに目を向け、彼らの活動を後押しするのが、私達の役目であると確信している。

2016年、カイロで行われたパルミラ遺跡の破壊状況報告会にて、この遺跡に長年携わってきた高齢のポーランド人研究者が静かに語った言葉を今でも思い出す。

「私達考古学者は、壊れてしまった遺構や遺物から歴史を復元するのが仕事です。私はもう高齢でフィールドに立つことはないでしょうが、次の世代が、バラバラに壊れた欠片をつなぎ合わせて、再び歴史を描くことになるでしょう」